



|                  |  |     |             |
|------------------|--|-----|-------------|
| 研究者名※            | 早野 薫<br>HAYANO Kaoru   | 学位※ | Ph.D. (言語学) |
| 所属※              | 文学部<br>英文学科  | 職名※ | 准教授         |
| 連絡先              | hayanok@fc.jwu.ac.jp   |     |             |
| URL              |  |     |             |
| researchmap※     | <a href="https://researchmap.jp/kaoruhayano">https://researchmap.jp/kaoruhayano</a>  |     |             |
| 研究分野※            | 言語学  |     |             |
| 研究キーワード※         | 会話分析、語用論、応用言語学、社会言語学   |     |             |
| 共同研究・競争的資金等の研究課題 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・発話デザインと「優先的権利」の諸相に関する会話分析研究(科学研究費若手研究・研究代表者、2020-2023)</li> <li>・英語授業内活動における認識性交渉の会話分析とタスクデザインの提案(科学研究費基盤研究(C)・研究担者、2018-2021)他</li> </ul> |     |             |
| 社会貢献・産学官連携活動等    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・NHK総合番組「未解決事件 オウム真理教」に知見提供(2012年5月)</li> <li>・朝日新聞山形版に取材協力(2012年11月)</li> <li>・NHK総合番組「あさイチ」に知見提供(2020年1月)</li> </ul>                      |     |             |
| 受賞歴              | <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本女子大学 学業・研究奨励賞(2005)</li> <li>・アメリカ社会学会 Ethnomethodology and Conversation Analysis Section, Graduate Student Paper Award(2009)</li> </ul> |     |             |

|                                   |  |        |
|-----------------------------------|--|--------|
| 研究領域                              | 会話分析、応用言語学、語用論   | (SDGs) |
| 研究テーマ※                            | 相互行為における知識とアイデンティティ:会話分析研究   |        |
| 概要※<br>(概ね1000字以内)<br>(写真・グラフ等自由) | <p>【研究の背景・目的・内容】<br/>私たちが言語・非言語的手段を駆使してコミュニケーションを成立させる「相互行為能力」の実態には、まだ記述しきれていない点が数多く残っている。私は、社会学から展開した「会話分析」の手法を用いて自然会話データをビデオデータ分析ソフトELAN(右図参照)を用いて分析し、様々な場面で相互行為がいかにして成立しているのか、参加者たちはどのような規範、手がかりに依拠しているのかを記述してきた。とくに、会話において「誰が何を知っているべきなのか」という問題を主たるテーマとしている。</p> <p>【応用例、研究の展望】<br/>私が取り組んでいる会話分析研究は、教育場面、ビジネス場面、医療場面など、社会を織りなす様々な場面でのコミュニケーションの成り立ちを解明し、それに参加する人々にとって何が問題となり得るのかを理解することに貢献している。</p> <p>【研究方法の特色】<br/>自然会話データを、研究者の研究的関心や事前に用意された仮説の検証を出発点とするのではなく、「動機づけされていない」、客観的、システムチックな手法によって分析することで、ときには研究者が想定を越える新たな「会話の仕組み」の発見を生み出す。</p> |        |
| 本研究関連特許・論文等                       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・Hayano, K. 2017. When (not) to claim epistemic independence: The use of <i>ne</i> and <i>yone</i> in Japanese conversation. <i>East Asian Pragmatics</i> 2(2): 163-193.</li> <li>・早野薫. 2021. 「保護者-保育士間会話における報告連鎖」田中廣明他(編)『動的語用論の構築へ向けて』開拓社. pp. 182-202.</li> </ul>  |        |
| 共同研究・外部機関との連携への期待                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・</li> <li>・</li> </ul>   |        |

